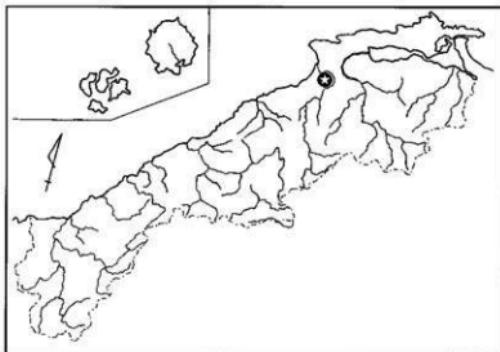


(一)出雲インター線新世紀道路(改良)工事地内
浜井場古墳群発掘調査報告書

2005年2月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

(一)出雲インター線新世紀道路(改良)工事地内 浜井場古墳群発掘調査報告書



浜井場古墳群の位置

2005年2月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会



浜井場古墳群空中写真（真上から）



浜井場古墳群空中写真（南から）



浜井場古墳群空中写真（北から）



浜井場古墳群空中写真（東から）



浜井場2号墳埋葬主体遺物出土狀況



浜井場2号墳埋葬主体完掘狀況

序

出雲市教育委員会では、平成15年度に島根県出雲土木建築事務所から委託を受け、
（一）出雲インター線新世紀道路（改良）工事地内に所在する浜井場古墳群の発掘調査を実施しました。

出雲市神西地区は、古代には『出雲國風土記』に記されているように、一帯が「神門水海」（現在の神西湖）に広く覆われていた地域です。しかし、周辺の微高地上や山間の盆地には豊富な水産資源と海上交通における要衝の地という立地条件を背景として集落遺跡や古墳が数多く存在していることが古くから知られています。

浜井場古墳群は、これまで調査されていませんでしたが、発掘調査を実施した結果、西部出雲平野沿いの南部丘陵地における一つの特徴である古墳時代中期頃の古墳であることが判明し、当該期における人々の生活の様子を探るうえでも貴重な資料となりました。本書はその報告書ですが、出雲の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたりご理解とご協力を賜りました地元の皆様をはじめ、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

平成17年2月

出雲市教育委員会

教育長 加藤 武行

例　　言

1. 本書は、島根県出雲土木建築事務所の委託を受け、出雲市教育委員会が平成15年度に実施した浜井場古墳群発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成15年（2003）11月4日～平成15年（2003）12月5日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市東神西町1460-1ほか3筆

4. 調査は、次の組織で行った。

平成15年度

〔調査指導者〕広江　耕史（島根県教育委員会文化財課主幹）、原田　敏照（同 文化財保護主事）

〔事務局〕川上　　稔（出雲市役所文化財室 室長）

〔調査員〕岸　道三（出雲市役所文化財室 主任主事）、南　奈保子（同 臨時職員）

平成16年度

〔調査指導者〕広江　耕史（島根県教育委員会文化財課主幹）、原田　敏照（同 文化財保護主事）

〔事務局〕川上　　稔（出雲市文化財室 室長）

〔調査員〕岸　道三（出雲市文化財室 主任主事）

5. 本書で使用した方位は真北を示す。

6. 遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

7. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸が行った。

8. 本書の執筆、編集は、上記の方々の協力を得て岸が行った。

9. 調査にあたっては、島根県出雲土木建築事務所および地元の方々から多大な協力を得た。記して謝意を表します。

10. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

日野　靖夫　　福田　益之　　塙原　立之　　井上　茂　　森山　矢市　　中村　正人
天喰　正治　　米山　清司

11. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

吹野　初子　　岡　幸子　　田部　　美幸

本文目次

カラー図版

序

例言

本文目次

挿図目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 位置と環境	2
III. 浜井場古墳群の発掘調査	
1. 発掘調査の概要	5
2. 造構と遺物	7
3. 周辺の古墳	13
IV. 自然化学分析	18
V. 総括	19
図版	図版 1 ~ 図版 7

挿 図 目 次

I. 調査に至る経緯

- 第1図 試掘トレンチ位置図 1

II. 位置と環境

- 第2図 浜井場古墳群周辺の遺跡 2

III. 浜井場古墳群の発掘調査

- 第3図 浜井場古墳群調査前地形測量図 5
第4図 浜井場古墳群調査後地形測量図 6
第5図 浜井場2号墳地形測量図 7
第6図 浜井場2号墳トレンチ堆積土層図 8
第7図 浜井場2号墳埋葬主体実測図 9
第8図 浜井場2号墳出土遺物実測図 10
第9図 石積遺構周辺地形測量図 11
第10図 石積遺構周辺トレンチ堆積土層図 11
第11図 石積遺構実測図 12
第12図 石積遺構周辺出土遺物実測図 12
第13図 丁之内古墳墳丘実測図 13
第14図 丁之内古墳埋葬主体実測図 14
第15図 古墳内遺跡地形測量図 14
第16図 古墳内遺跡埋葬主体実測図 15
第17図 浅柄Ⅱ遺跡埋葬主体実測図 16
第18図 北光寺古墳墳丘実測図 17

I. 調査に至る経緯

平成15年(2003)4月14日、島根県出雲土木建築事務所より一般県道出雲インター線新世紀道路(改良)工事地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地の北側には未調査ではあるが周知の遺跡である浜井場古墳(1号墳)、南側には古墳時代中期前半の大形前方後円墳として知られる北光寺古墳のほか周辺には小規模な古墳が散在する位置環境から、試掘調査によって遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は、同年9月2日に3ヶ所のトレンチを設定して実施した(第1図)。その結果、西側丘陵上に設定した第1トレンチでは遺構・遺物とも確認されなかつたが、東側丘陵上に設定した第2トレンチからは古墳の埋葬主体が、第3トレンチからは落ち込み状の遺構が確認された。

試掘調査の結果から、事業者である島根県出雲土木建築事務所と出雲市教育委員会、島根県教育委員会の3者で協議を重ね、事業予定地内の東側丘陵上約450m²を発掘調査対象とし、平成15年(2003)11月から出雲市教育委員会が調査を開始することで合意した。

発掘調査に至る手続きとしては、新発見遺跡であったため、試掘調査を実施した出雲市教育委員会から平成15年(2003)10月23日付で遺跡発見の通知(文化財保護法第57条の6第1項)を島根県教育委員会宛提出している。次に、事業者である島根県出雲土木建築事務所からは同日付で埋蔵文化財発掘の通知(同法第57条の3第1項)が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受理し、埋蔵文化財発掘調査の通知(同法第58条の2第1項)を同年10月31日付で島根県教育委員会に提出している。

発掘調査は平成15年(2003)10月から準備を進め、11月4日から開始した。現地は標高約37mの丘陵上であったことからすべてが人力の調査となり、思うように作業が進まなかつたものの、同年12月5日に調査を終了した。なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届(遺失物法第13条)、埋蔵文化財保管証、発掘調査の概報をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



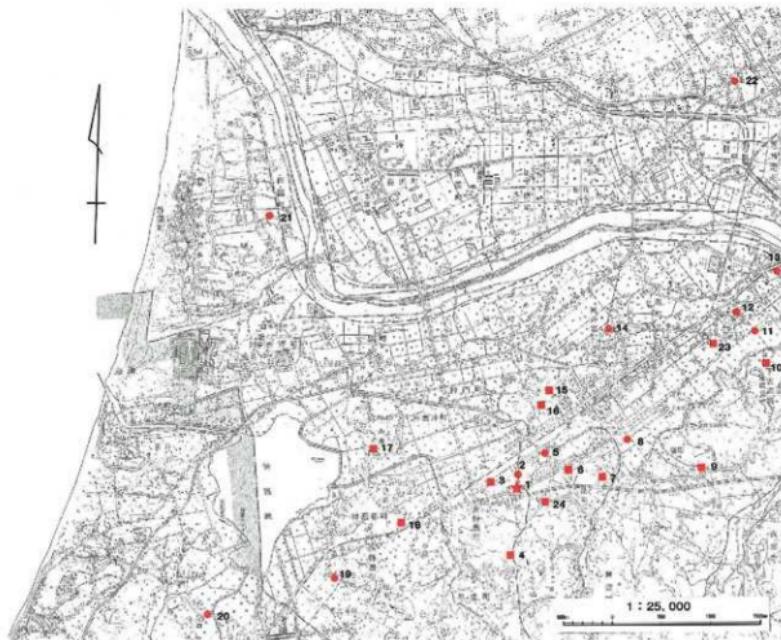
第1図 試掘トレンチ位置図

II. 位置と環境

(1) 遺跡の位置 (第2図)

浜井場古墳群は、中国山地から派生した南部の丘陵地が平野部へと延びるその先端、標高30~37m付近に位置し、出雲市知井宮町と東神西町との町境付近に所在している。遺跡の現況は山林であり、北に広がる平野部は主に水田として利用され、北西には神西湖が広がっている。なお、今回の調査地である丘陵の先端には未調査ではあるが浜井場古墳（1号墳）が知られ、新発見の浜井場2号墳とともに「浜井場古墳群」と称している。

浜井場古墳群が所在する周辺には東に間谷西古墳や浅柄Ⅱ遺跡、南には古墳時代中期前半の前方後



第2図 浜井場古墳群周辺の遺跡

- | | | |
|-------------|--------------|-------------|
| 1. 浜井場古墳群 | 2. 古墳内遺跡 | 3. 丁之内古墳 |
| 4. 北光寺古墳 | 5. 間谷西古墳 | 6. 間谷西古墳 |
| 7. 浅柄古墳 | 8. 浅柄遺跡 | 9. 深田谷横穴墓群 |
| 10. 妙蓮寺古墳 | 11. 田畑遺跡 | 12. 下古志遺跡 |
| 13. 古志本郷遺跡 | 14. 知井宮多聞院遺跡 | 15. 福知寺横穴墓群 |
| 16. 小浜山横穴墓群 | 17. 山地古墳 | 18. 神侍山横穴墓群 |
| 19. 田中谷貝塚 | 20. 西安原遺跡 | 21. 長浜貝塚 |
| 22. 垂丁田遺跡 | 23. 宝塚古墳 | 24. 浅柄Ⅱ遺跡 |

円墳として知られる北光寺古墳などが存在し、出雲市内でも古墳の密集地として知られている。

出雲平野を取り巻く地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によれば、現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して入海のような状況を呈していた神門水海（現在の神西湖）に注いでいたようである。

このような地形のもと、浜井場古墳群は神門水海が眼下に迫る丘陵上に立地していたものと考えられ、少なくとも鎌倉時代の初期頃までは同様な景観であったと考えられる。また、豊富な水産資源や海上交通を背景にこの地域を治めた有力者の存在が推察されるとともに、神門水海周辺に所在する山地古墳や丁之内古墳、古墳内遺跡などこの地域には古墳時代中期頃の古墳が密集していることが一つの特徴となっている。

（2）歴史的環境

出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある上長浜遺跡が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前中期から中期にかけての上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡、原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡、平野中央部の矢野遺跡、藏小路西遺跡などからも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡（湖陵町）などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡など集落を囲繞する環濠を有する大規模集落が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。

また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓 6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60mもある3号墓など大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、首長の権力が強大になってきたことが窺える。そして、平成13年の発掘調査によって、平野部の中野美保遺跡からも四隅突出型墳丘墓が発見され、集落と墓域の関係などを考えるうえで注目されている。

古墳時代になると、これまで弥生時代中期中葉から形成された大規模集落がほぼ同時期に急激に衰退する傾向にあり、この時期に畿内勢力の進出など、大きな社会的変革があったことが考えられている。そうした中で、出雲平野には古墳時代中期の遺跡はほとんど確認されていないのが現状であった。しかし、近年の発掘調査によって、今まで空白とされてきた当該期の遺跡が相次いで発見されている。

斐伊川左岸の南部丘陵地には三谷遺跡や長廻遺跡が所在し、古墳時代中期の上塙や堅穴式住居跡などが確認され、神戸川右岸の南部丘陵地にも三田谷Ⅰ遺跡から多量の遺物とともに堅穴住居跡などが確認されている。一方、平野部ではこれまで天神遺跡や古志本郷遺跡などで少量の遺物が出土している程度であった。しかし、近年の発掘調査によって四隅突出型墳丘墓が発見された中野美保遺跡や中野西遺跡

からは土壙などの遺構に伴って古墳時代中期の遺物が確認され、平野北部の井原遺跡でも多量の遺物が出土している。いずれも斐伊川左岸の旧自然堤防上に立地していたものと考えられ、平野部においても当該期の人々のくらしが明らかになりつつある。

また、当該期の古墳としては、北山山脈に天寺古墳や上島古墳（平田市）が築造される他、神門水海に近い南部丘陵地には北光寺古墳、県内では類例の少ない筒型銅器を副葬し、内海航路を押さえた首長の墓と目される山地古墳などが築造される。

古墳時代後期後半には、今市大念寺古墳・上塙治築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、平野南部の丘陵斜面には上塙治横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺など私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓のほか、近年の発掘調査によって、墳丘内から石製骨蔵器が発見された光明寺3号墓などの初期火葬墓があり、古墳から火葬墓への過渡期の様子が明らかになりつつある。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されているが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、出雲大社境内遺跡から平安時代から中世にかけての出雲大社の壮大さを示す3本を束にした柱跡が確認されたことは、信仰対象としての出雲大社を考えるうえで貴重な発見となっている。そのほか、矢野遺跡からは14～15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、蔵小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

III. 浜井場古墳群の発掘調査

1. 発掘調査の概要

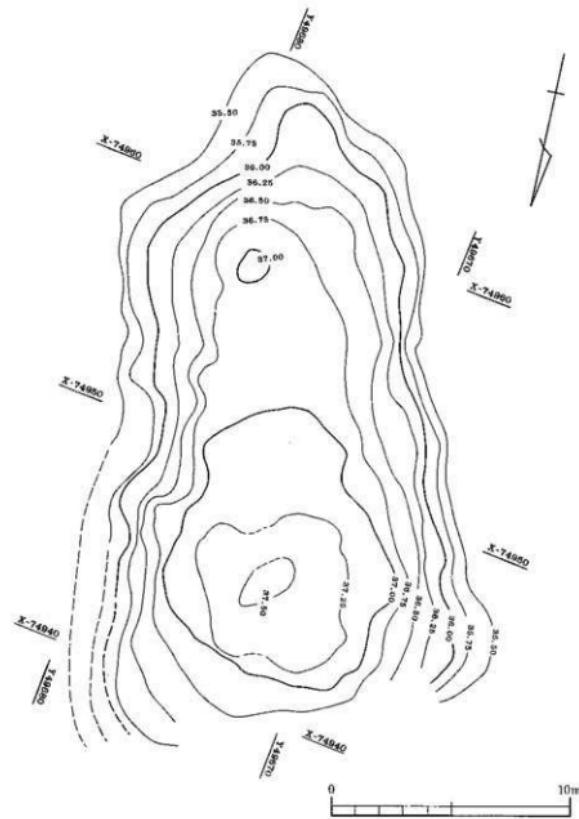
調査地は、標高35~37mに位置する丘陵尾根上にあり、調査前には山林として利用されていた地域である。また、調査前の地形（第3図）からは北側に約10m四方の平坦地、南側にも約5m四方の平坦地が確認されていた。地形から前方後方墳あるいは前方後方墳の可能性があることに留意しながら調査を進めることとした。調査に入る前に、試掘調査によって埋葬主体が確認されていた第2トレンチ付近の最も標高の高い地点を中心として東西南北に5m間隔の杭を設定し、堆積土を確認するトレンチをそれぞれ第1~第4トレンチとした。そして北側平坦地の最も標高の高い地点を中心として東西南北に同様に杭を設

定し、トレンチをそれ
ぞれ第7~第10トレン
チとした。なお、調査
面積は南北約30m、東
西約15mの約450m²で
ある。

調査は、平成15年
(2003)11月4日に開始
し、木の根の処理や重
機の使用が困難で人力
による調査となり、思
うように作業が進まな
かったものの、同年12
月5日に調査を終了し
ている。

層序

調査地には8ヶ所の
トレンチを設定してい
るが、基本的な層序と
しては表土の下には褐色系の腐植土が堆積し、
地山である山廻りレキ
層に達する。また、斜
面沿いのトレンチでは
丘陵上からの流出によっ



第3図 浜井場古墳群調査前地形測量図

て堆積土が厚くなり、下層には山廻りレキを含む明褐色土や明黄灰色土が堆積して地山である山廻りレキ層に達している。なお、これらのトレンチすべてにおいて人為的に盛土をしたような堆積は認められていない。調査後の地形を見ると（第4図）、調査前には確認できなかった北側と南側の平坦地との間には幅約3.6m、深さ約40cmの落ち込みが東西方向に認められ、この地点で南北の平坦地が明確に分かれることが確認されている。

遺構

遺構は、試掘調査の第2トレンチで確認されていた埋葬主体を中心として古墳が1基検出され、浜井場2号墳としている。この古墳の埋葬主体は2段に掘り込まれ、拳大から20cm大の石が遺構の底部直上あるいはやや浮いた状態で密に検出されている。また、堆積土の状況からは盛土は認められないため、地山削り出しの古墳で、古墳時代中期頃に築かれた可能性の強いものである。なお、浜井場2号墳の南側には東西方向に深さ約40cmの溝状

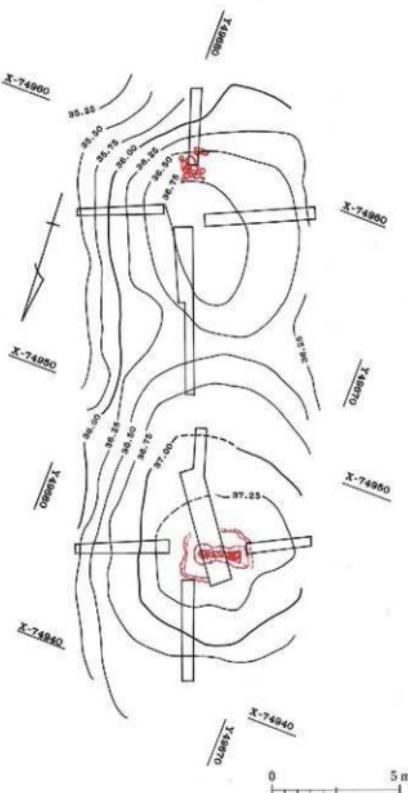
に落ち込んだ部分が認められており、古墳の区画溝である可能性もある。

一方、南側の平坦地においては東西約1.2m、南北約1.3mの範囲に人頭大から50cm程度の凝灰岩が集中して検出され、石積遺構としている。しかしながら、この遺構の下面からは埋葬主体などが検出されなかつたことから古墳とは考えられず、性格は不明である。なお、この遺構周辺のトレンチでも盛土は確認されていない。

遺物

遺物には浜井場2号墳の埋葬主体から直刀残欠をはじめ刀子や鉄鎌と考えられる鉄製品が出土している。これらはすべて小片であり、2段掘りの埋葬主体の1段深く掘り込まれた部分から出土しており、その周辺での遺物は皆無である。

また、石積遺構周辺では陶器片が1点出土している。小片で時期的判断は難しいが、瓦質で円形に穿孔された部分が認められるところから、近現代の遺物と考えられるものである。なお、石積遺構との関連は不明である。



第4図 浜井場古墳群調査後地形測量図

2. 遺構と遺物

調査区北側で古墳を1基（浜井場2号墳）、南側で石積遺構を1検出している。各遺構の概要は以下のとおりである。

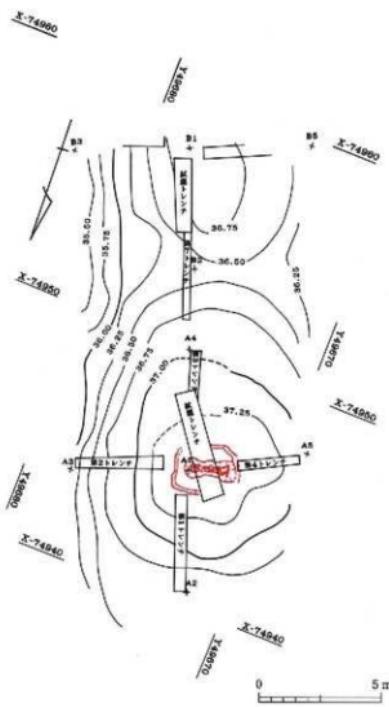
浜井場2号墳（第5図）

調査区北側で検出した古墳で、試掘調査の第2トレンチにおいて既に埋葬主体が確認されていたものである。堆積土を調査するためにA1杭を基準として東西南北に5m間隔の杭を配置し、4ヶ所のトレンチを設定している。これらトレンチの堆積土状況からは人為的な盛土は認められないことから、地山削り出しの古墳である可能性が強い。

堆積土の状況を第6図に示している。東側の急斜面に接した第2トレンチでは現表土である黒褐色土の下面には腐植系の淡褐色土が堆積し、墳裾に近いと考えられる地点の下層には粒子のやや粗い褐色土が堆積して地山である山廻りレキ層に達している。一方、比較的緩やかな傾斜である第4トレンチにおいては、現表土である黒褐色土の下面にはわずかに腐植系の淡褐色土が認められるものの、第2トレンチで認められた褐色土は堆積していない。なお、埋葬主体を中心として第2トレンチの墳裾面が標高36.3mであるのに対し、第4トレンチでは標高37.0mと70cmも高くなっていることが注意される。これは地形的な制約を受けたものがあるいは後世の削平があったものと考えられる。

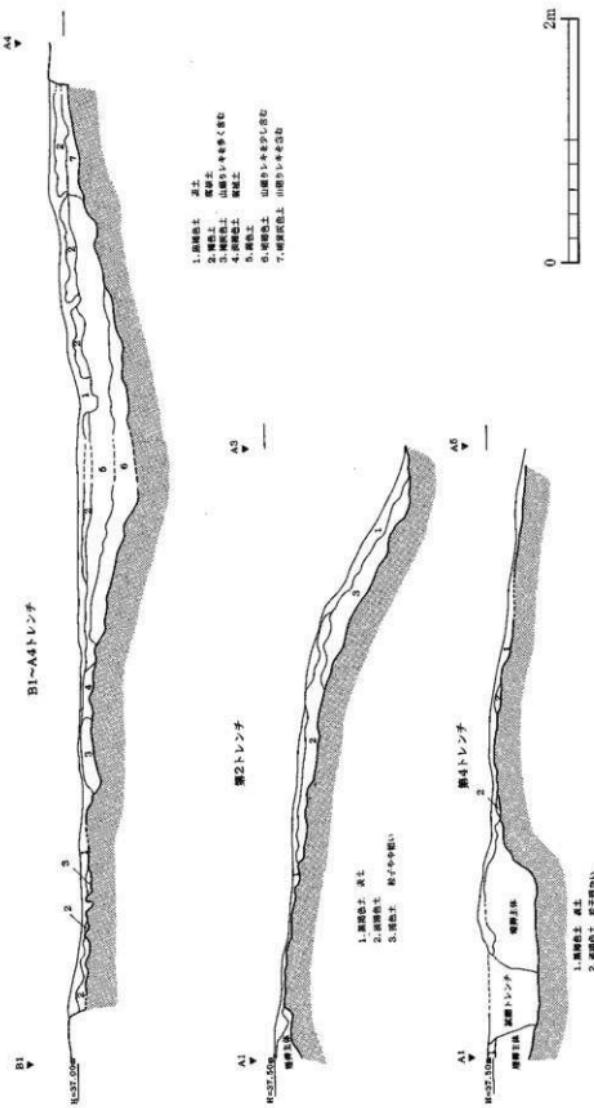
また、石積遺構を中心としてB1杭～A1杭に第7トレンチを設定している。このトレンチの中間地点では幅約3.6m、深さ約40cmの西南西一東北東方向に延びる溝状の落ち込みが確認（5・6層）されている。この溝状遺構は、埋葬主体の方位とも一致することから、浜井場2号墳の区画溝である可能性が強く、この溝状遺構の位置から推察すれば、一辺12m程度の方墳である可能性が指摘できる。しかしながら、この他には区画溝と考えられる遺構は検出されていない。

埋葬主体（第7図）は地山に2段に掘り込まれ、基軸は前述した溝状遺構と同様に西南西一東北東方向に向いている。掘り方は東西約2.5m、南北約2.1mで、1段深く掘り込まれた主体部は、長軸約2.0m、短軸約



第5図 浜井場2号墳地形測量図

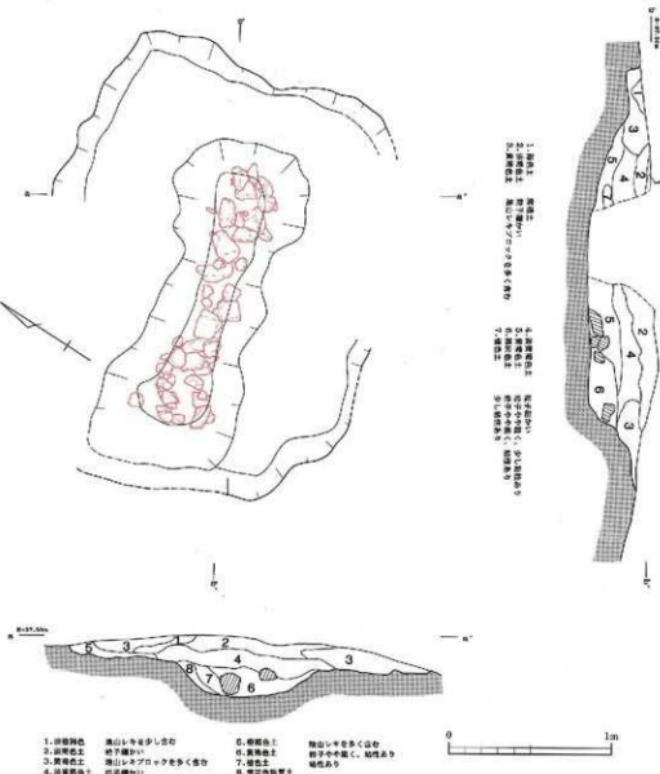
第6図 浜井堺2号墳トレンチ堆積土層図



60cm、深さは約40cmを測る。なお、主体部の検出高は標高約37.4mである。

埋葬主体における覆土の状況は、2段掘りの上層には淡橙褐色土、淡褐色土、地山レキブロックを含む黄褐色土、粒子の細かい淡黄褐色土が一様に堆積しているが、北西側では一部に橙褐色土の堆積が認められる。一方、1段深く掘り込まれた主体部においては、少し粘性のある黄褐色土が広く堆積し、肩部には褐色土、黄灰色粘質土の堆積が認められる。肩部からは約45度の角度で落ち、底面は平坦に作り出しており、底面における標高は約36.8mとほぼ一定である。なお、底面には排水溝と考えられる施設は認められない。

主体部からは、拳大から20cm程度の石が底部直上あるいは10~20cm浮いた状態で密に検出されている。これらの石は全てが1段深く掘り込まれた主体部からの出土であり、その周辺では皆無である。古墳の埋葬形態としては、木棺直葬の底部あるいは上部に石が置かれていたものが木棺の腐植によって落ち込んだものと考えられる。また、遺物としては直刀残欠をはじめ刀子や鉄鎌と考えられる鉄製品などが1段深く掘り込まれた主体部から出土している。これらのうち、直刀は主体部の中央部から出



第7図 浜井場2号墳埋葬主体実測図

上し、刀子や鉄鎌は東側で出土していることから、東側に頭位を向けて埋葬されていた可能性が強い。また、これらはいずれも小片であることから盗掘を受けているものと考えられるが、石の出土状況からは特に散乱したような形跡は認められない。

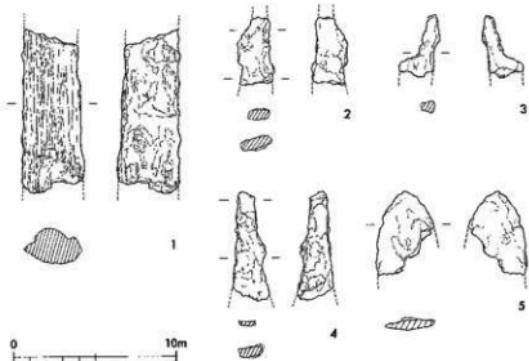
古墳が築かれた時期については、地山削り出しの古墳である可能性が強いことや出土遺物、埋葬形態などから古墳時代中期あるいはそれ以前の古墳であると考えられる。浜井場2号墳の周辺ではよく似た形態をもつ古墳として丁之内古墳や古垣内遺跡などが所在しており、当該期の古墳が密集する地域として今後、注視していく必要がある。

浜井場2号墳の出土遺物（第8図）

1は、直刀残欠である。最大長10.2cm、幅3.5cmを測り、刃先が片方につくものである。銹化が著しいが、厚さは約8mm程度と考えられる。片面には木質の痕跡が認められ、鞘あるいは木柄に納められていたものであろう。なお、直刀の残欠と考えられるものはこの1点のみであることから、盗掘を受けている可能性は高い。

2・3は刀子の残欠と考えられるものである。2は、片端が細くなっていることから茎付近のものであろう。断面は約6mmを測り、木質や布目痕などは認められない。3も刀子あるいは鉄刀の茎付近と考えられるものである。形状から第9図—2とは別個体であることは明らかであり、茎部分の長さは約2.5cmを測る。茎部分の上面には刻目状の溝が認められ、この部分にコイル状のものを巻き付けたものと考えられる。刀身は片刃で断面は三角形状を呈しているが、茎の長さから推察すると鉄刀の可能性があるものである。

4・5は、鉄鎌であろう。4は刃部及び茎部が欠損しているが、現存長6.5cm、厚さ6mmを測る。形状から推察すれば、主頭あるいは方頭鎌群に属するものと考えられる。5は刃部と鎌身部の残欠で、現存長5.2cm、厚さ6mmを測る。柳葉あるいは三角形鎌群に属するものと考えられる。いずれの鉄鎌も主に古墳時代前期から中期にかけて盛行する鎌であることが注意される。

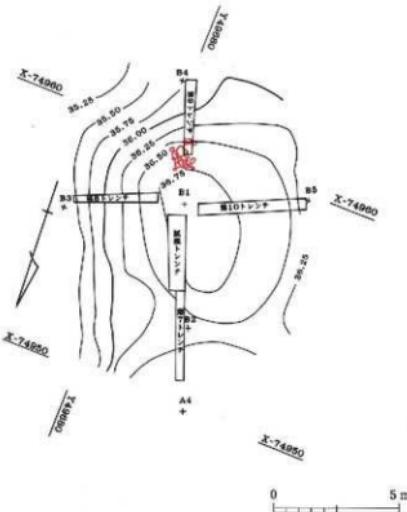


第8図 浜井場2号墳出土遺物実測図

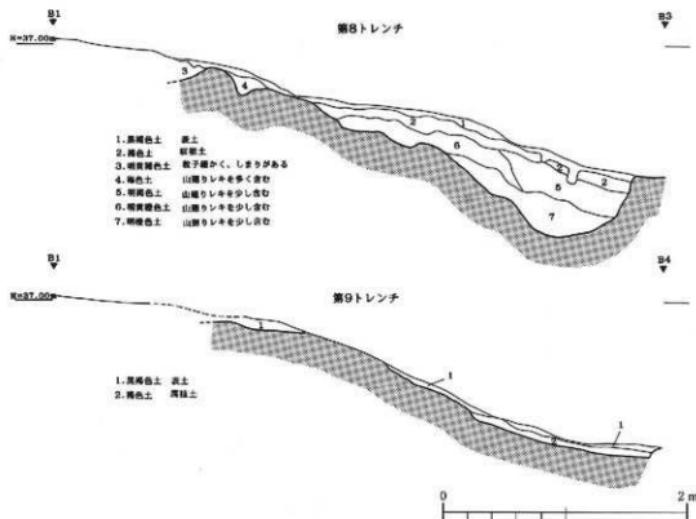
石積遺構（第9図）

調査区南側で検出された遺構で、標高が最も高いB1杭から南南東に約1.0mの地点を中心として幅約1.2m×1.3mの範囲に石が重なり合った状態で出土した遺構である。石の大きさは人頭大から大きいものでは50cmを測るものもある。なお、この遺構は、調査前から石が露出した状態であったことから、竪穴式石室の可能性にも留意しながら調査を進めたが、この下面からは遺構は検出されていない。

石積の状況を第11図に示しているが、石は平坦面から斜面にかけて重なり合うような状態で出土している。しかしながら、その配置には統一性はなく、ややバラツキがあることから、原形を留めているものとは考えにくい。なお、石積の検出高は標高36.55m～37.1mに位置している。石は風化が著しいものの凝灰岩が用いられており、



第9図 石積遺構周辺地形測量図



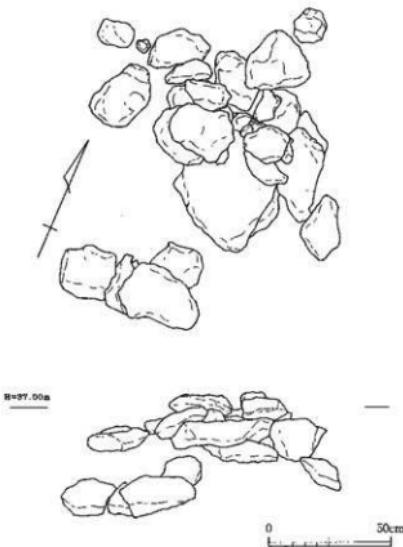
第10図 石積遺構トレンチ堆積土層図

この周辺では認められない石であることから人為的に運び込まれたことが明らかである。また、斜面下や遺構の周辺に転落したと考えられる石は皆無の状態である。

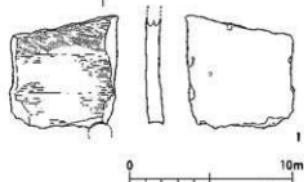
B1杭を中心として東西南北に5m間隔に杭を配置し、第7～第10トレンチを設定（第10図）している。東側が急斜面となる第8トレンチにおいては、表土である黒褐色土の下面には腐植系の褐色土が堆積し、下層には山廻りレキを含む明褐色土や明黄褐色土、明橙色土が堆積して地山である山廻りレキ層に達している。急斜面である下層の堆積は、おそらく平坦部の崩壊によるものと考えられる。一方、石積遺構が検出され、南側が斜面となっている第9トレンチにおいては、地山である山廻りレキ層がほぼ剥き出しの状況であり、表土である黒褐色土の下面には腐植系の褐色土が堆積するのみで、地山までの堆積は厚いところでも10cm程度しか認められない。また、いずれのトレンチにおいても人為的に盛土されたと考えられる堆積は認められない。

遺物は石積遺構内からは出土していないが、遺構から約1.0m東の地点で土器片が1点出土している（第12図）。1は瓦質の陶器片で、外面はナデ、内面は細かなハケ調整が行われている。また、一部には径1.5cm程度の円形状の穿孔が認められる。石積遺構との関連は不明であるが、形状や焼成の状況から判断すると近現代の遺物である可能性が高い。

石積遺構の性格としては、下面から遺構が検出されなかったことから、竪穴式石室の石蓋が取り除かれ、そのまま放置された状態であるとは考えにくい。むしろ、石積遺構の周辺は地山が剥き出しの状態であったことから、そう占くはない時期まで何らかの目的で利用されていたことが推察され、1点のみではあるが近現代と考えられる陶器片も出土していることなどから、荒神様のように祭祀の対象となっていた可能性が強い遺構である。



第11図 石積遺構実測図



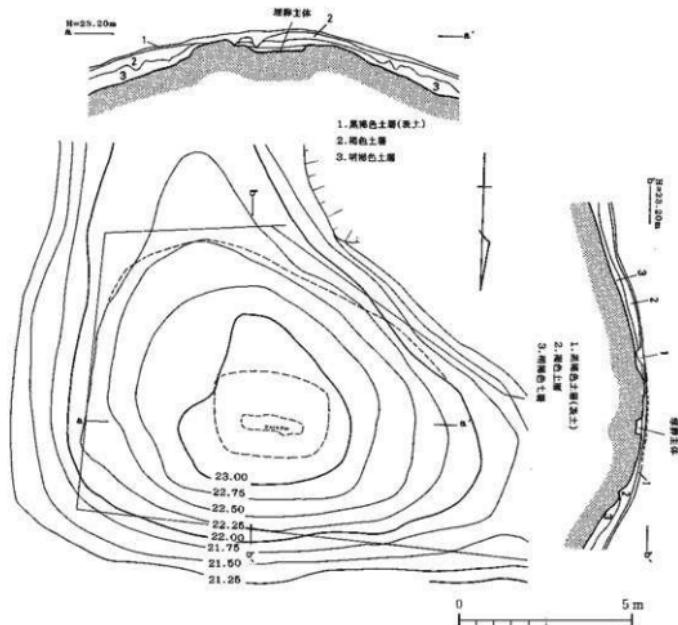
第12図 石積遺構周辺出土遺物実測図

3. 周辺の古墳

丁之内古墳 (第13図・第14図)

浜井塙古墳群の北西、南側から派生した丘陵の先端部、標高23mの頂上部に位置（現在は車両基地建設により消滅）している。墳丘は一辺10m、高さ1mと小規模であり、墳形は尾根の形に合わせたためかやや変形しているが、方墳と推定されている。外部施設としての葺石や埴輪は存在せず、埋葬施設は墳頂部の平坦面に掘られた長辺180cm、短辺30~60cmの長方形の土壙である。盛土は流出しており、深さ10~20cmと浅く、素掘りで段のない簡単なもので、内部には木棺を納めていたものと推定される。

副葬品としては、土壙内から鉄劍1振と鉄鎌1束（10本）が出土している。劍は長さ86cmを測り、柄や木柄ではなく綿布で幾重にも巻かれていた痕跡が認められる。なお、供獻用の土器も出土は皆無である。これらの出土品だけで時期を確定することは難しいが、古墳時代中期頃の築造と推定されている。



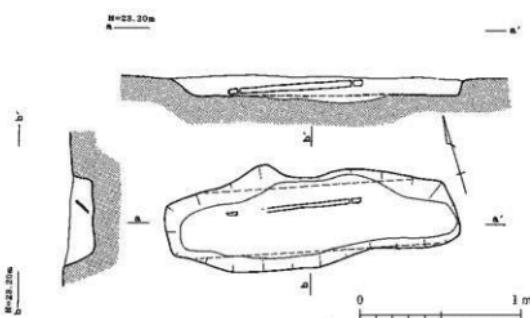
第13図 丁之内古墳墳丘実測図

古墳内遺跡⁽³⁾（第15図・第16図）

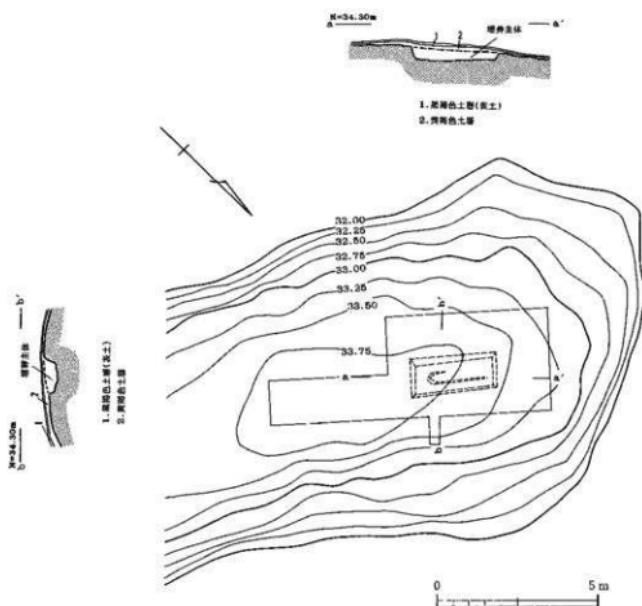
浜井場古墳群の北方、南から延びる尾根が北と西に分岐する標高34m地点に位置している。（現在は車両基地建設により消滅）

遺構は、平面プランが長方形を呈す土壙が1基知られている。長軸2.95m、短軸1.15mを測り、深さは北側では0.2mと浅く、上面はかなりの削平を受けていると考えられている。また、壙底のはば中央には幅0.35m、長さ1.9mにわたつて深さ5cm程度掘り窪めている。

る箇所が認められ、これは木棺を壙底に安置するためのものと推定されている。

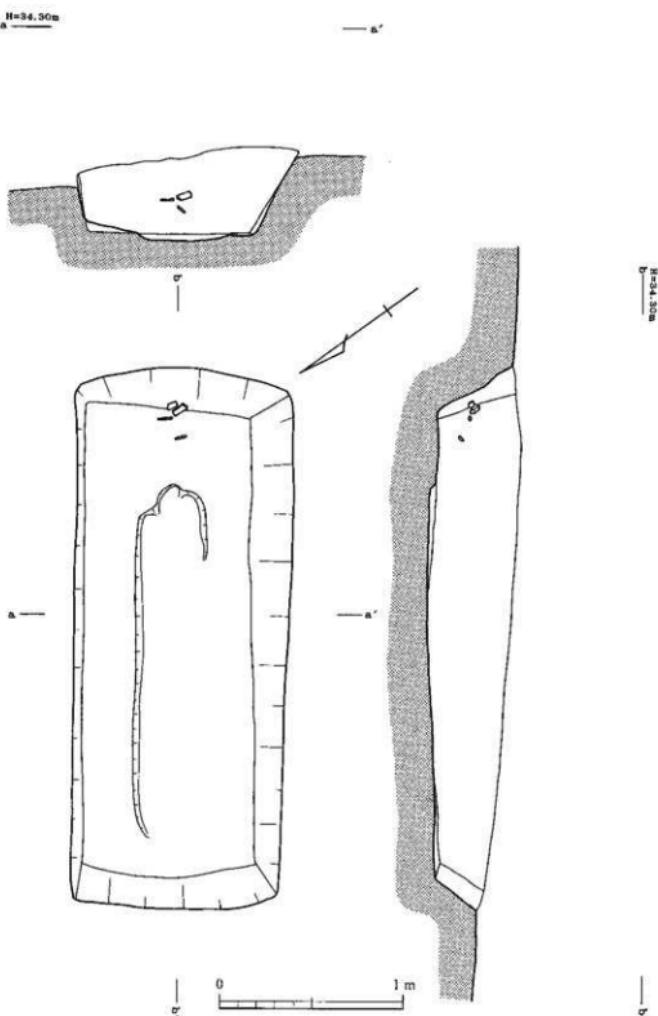


第14図 丁之内古墳埋葬主体実測図



第15図 古墳内遺跡地形測量図

副葬品としては、砥石2丁と鉈1本という貧弱なもので、土器の出土を欠いている。これらの出土遺物から時期を確定することは難しいが、丁之内古墳との類似性から古墳時代中期頃のものと考えられ、本来は小規模古墳の埋葬主体であった可能性も指摘されている。



第16図 古墳内遺跡埋葬主体実測図

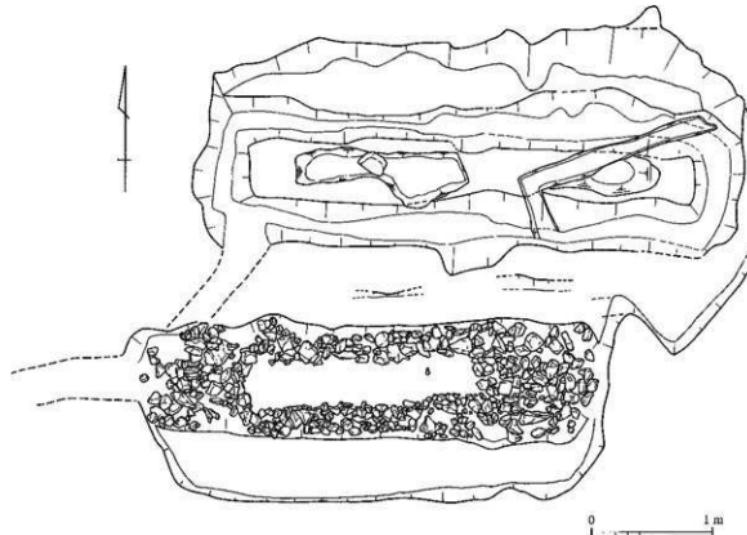
浅柄 II 遺跡⁽⁴⁾（第17図）

浜井場古墳群の東方、南側丘陵から派生した標高63mあまりの丘陵上に位置し、平成15年（2003）に島根県教育委員会によって発掘調査が行われている。

この遺跡は、本来は古墳の埋葬主体であった可能性が強いが、頂上部及び斜面は削平を受けているため、古墳の規模及び墳形は不明である。

遺構としては、頂上部から2段に掘り込まれた埋葬施設が2基検出されている。北側にある第1主体は、長さ4.5m、幅2.0mの土壌の底部に小礫を敷き、その上に赤味がかかった粘土を詰めて木棺を安置した粘土櫛である。一方、南側の第2主体は長さ4.0m、幅1.7mの土壌の中に木棺を置き、その外側に拳大の礫を並べた礫櫛で、第1主体の後に築造されている。また、2つの土壌の西側には底に礫を敷いた排水溝の存在が確認されており、この溝は2つの主体部が共有していた可能性が強いものと指摘されている。

副葬品が供獻上器も含め1点も検出されていないことから、詳細な年代は明らかではないが、この古墳の築造時期については、粘土櫛や礫櫛が前期後半の古墳の様相と考えられることから、当該期のものと推定されている。



第17図 浅柄 II 遺跡埋葬主体実測図

*島根県埋蔵文化財調査センターによる実測図を基にした

(5)
北光寺古墳（第18図）

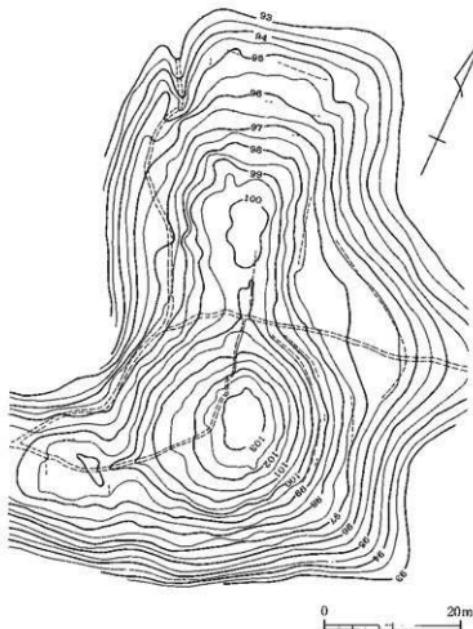
浜井場古墳群の南方、標高103mの丘陵頂部に築かれ、古墳からは神西湖や日本海、さらに遠く北山を臨むことができる絶景の地に位置している。

墳丘は部分的に崩れているが、全長64mを測るかなり均整がとれた大形の前方後円墳である。後円部は径37m、高さ約6m、前方部長約30m、前方部の高さは約3.7mを測る。なお、外部施設としての葺石や埴輪は認められない。

埋葬施設は後円部では確認されていないが、前方部において小口積みの竪穴式石室の一部が発見されている。前方部の先端には多くの平らな剣石と赤色顔料が塗られた凝灰岩の切石とが散在している。石は石棺の破片であり、長持形系の石棺が石室内に置かれていたことが知られている。

副葬品としては、以前この石室から2振の鉄剣が出土したといわれているが、詳細は不明である。時期は古墳時代中期前半で、およそ5世紀前葉～中葉に属すると推定されている。

- 註 (1)『考古資料大観7 弥生・古墳時代 鉄・金銀製品』千賀 久・村上恭通編 小学館 2003年
(2)『出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』「丁之内古墳」出雲市教育委員会 1981年
(3)『出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』「古墳内遺跡」出雲市教育委員会 1981年
(4)『山陰自動車道延設に伴う埋蔵文化財発掘調査説明会資料一説明Ⅱ道沿い』島根県埋蔵文化財調査センター 2003年
(5)『北光寺古墳発掘調査現地説明会資料』島根県埋蔵文化財調査センター 2004年



IV. 自然科学分析

出雲市浜井場 2 号墳出土金属製品の成分分析結果

(株)吉田生物研究所

1. はじめに

出雲市に所在する浜井場 2 号墳から出土した金属製品 5 点について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

2. 資料

調査した資料は表 1 に示す金属製品 5 点である。

表 1 調査資料一覧

No.	遺物名	特徴
1	直刀の一部	長さ約10cm 厚みがやや厚い
2	刀子の一部	長さ約5cm 厚みは薄い
3	刀子の一部か?	長さ約4cm 厚みは薄い
4	鉄鎌一部	長さ約7cm 厚みは薄い
5	鉄鎌一部	長さ約6cm 厚みは薄い

3. 方法

資料本体に蛍光X線を照射して分析した。分析装置は、理学電機工業製の全自动蛍光X線分析装置3270E（検出元素範囲B-U）を用いた。

4. 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す。No. 1 ~ 5 すべてからFeが検出されている。
Al, Si, P, S, K, Ca, などは土壤に由来する成分と思われる。よって表 2 に分析結果一覧を示すが、
その数値はあくまで参考にすぎない。

表 2 出雲市出土金属製品の成分分析結果一覧表

元素	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
Al	0.59	0.36	1.5	1.9	0.64
Si	1.2	0.9	5.5	8.2	1.6
P					
S	0.18	0.17	0.23	0.16	0.13
K			0.26	0.38	
Fe	98	99	93	89	98

V. 総 括

今回の調査においては、新発見遺跡である2段掘りの埋葬主体をもつ浜井場2号墳と性格は不明であるが石積造構を1検出することができた。

浜井場2号墳は地山削り出しの古墳と考えられ、B1～A4トレンチで検出された溝状造構が区画溝であると考えると、一辺約12m程度を測る方墳の可能性をもつものである。埋葬主体は木棺直葬と考えられ、その上面または下面に石を配置したものと推察される。また、盗掘を受けてはいるものの、直刀や刃子、鉄鎌の残欠が数点検出されており、埋葬形態や副葬品からも古墳時代中期あるいはそれ以前に築かれた古墳である可能性が強い。

浜井場古墳群が所在する周辺には、丁之内古墳や古垣内遺跡などよく似た埋葬形態をもつ古墳が点在し、この分布はさらに湖陵町、多伎町にかけての西部出雲平野の周辺部にまで波及している。斐伊川以西の出雲平野にあっては、今市大念寺古墳、上塙治築山古墳に代表される壮大な横穴式石室を有する後期古墳のイメージが強いが、この周辺に古墳時代中期頃の小規模古墳が点在している様相は、華々しい飛躍を遂げる後期古墳文化への導火線として、今後ますます注視していかなければならない地域であろう。

石積造構の性格については断定できないが、少なくとも浜井場2号墳との関連はないものと考えられる。

浜井場古墳群の周辺では、近年、山陰自動車道建設に関連してアクセス道の整備が急ピッチで進んでいる状況であり、新たな古墳が発見される可能性の高い地域である。また、大形の前方後円墳として知られる北光寺古墳の学術調査も実施される予定である。今後、周辺で調査する機会があれば、当該地における古墳の実像を明らかにし、後世に伝えていくことが望まれる。

報告書抄録

フリガナ		(イッパンケンドウ) イズモインターフンシンセイキドウロ (カイリョウ) コウジチナイ ハマイバコフングンハックツチョウサホウクショ						
書名		(一) 出雲インター線新世紀道路(改良)事業地内 浜井場古墳群発掘調査報告書						
編集者名		岸道三						
編集機関		出雲市教育委員会						
所在地		〒693-8530 島根県出雲市今市町109番地1						
発行年月日		平成17年2月18日						
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
浜井場 古墳群	島根県 出雲市 東神西町	322032	W126	35度 19分 26秒	132度 42分 51秒	2003.11.05 ~ 2003.12.04	400m ²	(--) 出雲 インター線 新世紀道路 (改良)事業
収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
浜井場 古墳群	古墳	古墳時代 中期頃	古墳1基 (土壙墓) 石積遺構1	鉄刀 土器	<ul style="list-style-type: none"> ●出雲平野では稀少な古墳時代中期頃の古墳 ●2段掘りの墓壙に石列区画溝と考えられる落ち込みあり ●石積遺構は性格不明 			

図版 1



図版2



浜井場2号墳
埋葬主体遺物出土状況



浜井場2号墳
埋葬主体遺物出土状況
(部分)

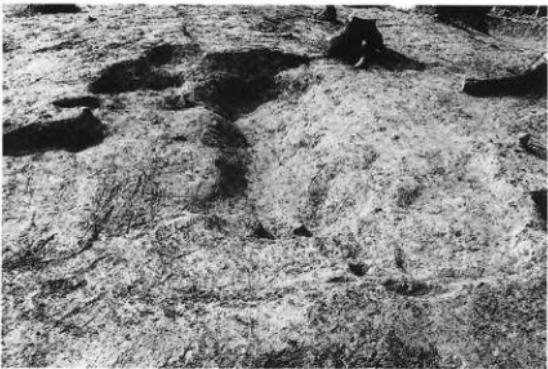


浜井場2号墳
埋葬主体検出状況

图版3



浜井場2号墳
埋葬主体堆積土状況



浜井場2号墳
埋葬主体完掘状況

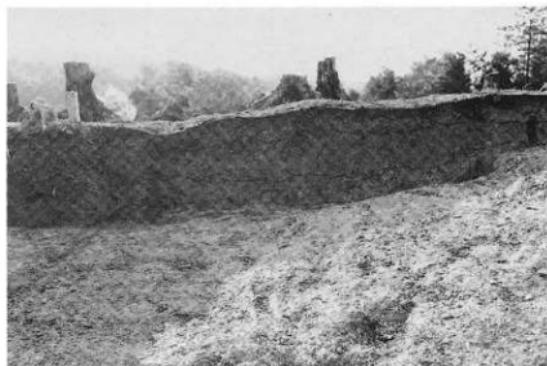


浜井場2号墳
埋葬主体完掘状況

図版4



浜井場古墳群
完掘状況(南から)



浜井場2号墳
南側落ち込み部堆積土状況



浜井場2号墳
南側落ち込み部堆積土状況

図版5

石積遺構(調査前)



石積検出状況(南から)



石積検出状況(北から)



図版6



石積遺構調査状況



第6レンチ堆積土状況



石積遺構完掘状況
(南東から)

図版7



浜井場2号墳出土遺物



浜井場2号墳出土遺物
X線写真

(一) 出雲インター・飯石新疊紀道路(改良)工事地内
浜井場古墳群発掘調査報告書

平成17年(2005)2月発行

編集・発行 出雲市教育委員会
出雲市今市町109番1
印刷・製本 オリジナル
出雲市渡橋町618-9